

# 沖方丁×天野純希



# ×乾 緑郎×木下昌輝

大坂城をめぐる人々の視点で  
それぞれの戦場を描いた競作アンソロジー。  
若手作家4人が、その魅力を余すことなく語り尽くす。  
いざ、戦国最終決戦へ!



——今回、『大坂城』に参陣した七人の内、七〇年代生まれの若手四人にお集まりいただきました。第一弾『決戦！関ヶ原』から引き続きの参戦となる冲方丁さんと天野純希さん、そして第二弾『決戦！大坂城』から新たに加わった乾縁郎さんと木下昌輝さん。歴史時代小説の最前線を走る彼らの「決戦！」や、いかに!?

冲方 一作目のときはけっこう緊張したんですが、その緊張感が作品に反映されて結果的にいいアンソロジータになったと思います。今回もそうなるという確信があったので、わりと肩の力を抜いて書きました。

天野 一作目が売れちゃったプレッシャーというのは少し感じました。でもそういう

ますよね。

天野 回を重ねるごとにひねり具合が大きくなっていくんじゃないかと……。

### 関ヶ原の戦いから十五年

冲方 今回僕が書いた豊臣秀頼は、本当に史料が少ない。そして徳川史観に基づく後世における汚名がすごいんですね。丹念に読み解いていくと、実は欠点が見つからないくらい堂々たる君主っぷりなんです。天野 秀頼をここまですごい人にするのか、と思いましたね。

木下 秀頼って大坂の陣では正直活躍していない。何もアクションを起こしていないので書きようがないと思っていました。こんな面白い超人というか、泰然とした神様

ことは気にせず、自分のできることをやろうという開き直りのような気分で臨みました。

乾 僕は声をかけてもらったとき、自分が混ざっていいのかなあ、という思いがありました。皆さん正統派の歴史小説を書かれる中、だいぶチャレンジな気分で参加させていただきました。

木下 皆さんすごい方たちなので、胸を借りるつもりで書きました。自分の作品が面白くなくても、他の方たちの作品で買ってくれるだろう、と。ただ、絶対に他の人が書けないものを書こうと思いました。

冲方 今日ここにはいない葉室麟さんや伊東潤さん、富樫倫太郎さんも含め、皆さん、一作目のとき以上に趣向を凝らしてい

のような切り口があるのかと驚きました。

乾 大坂城の人々を連れて天に昇っていき、宗教画のようなイメージが浮かんできました。選ばれた人の恍惚みたいなもので、僕は秀頼に対して特にイメージがなかったので、抵抗なく読めました。

冲方 下手すると天草四郎のようになってしまうので、そこを分別して書きました。日本人の中心にある君主観、誰が何を投影してもいいような存在ですが、明らかに帝っぽく書くと別のカドが立ちそうで、よりパーソナリティを軸に書いたつもりです。

木下 大坂城は、関ヶ原と違って「小早川秀秋が裏切らなかつたら」というifがないですよ。だから大局よりも個人の戦いに焦点を合わせざるを得ないと思っていた

ら、冲方さんや葉室さんは徳川家康の寿命や朝廷との関係、女の外交などを交えて書かれていて、とても勉強になりました。

冲方 茶々ちやちや(淀殿よしのどの)と秀頼はいわばセツトになるわけですが、葉室さんの茶々の描き方は意外でした。女の色香や感情を出すのではなく、みんな一緒に死にましよう、という「ザ・女武将」という印象。乾 たしかに意外でした。

冲方 茶々は秀頼よりもさらに一段大局に在りますよね。自ら婚姻を計画したり、そもそも自分の妹(徳川秀忠ひでただの正室・江こう)が徳川家にいるというのもある。

天野 関ヶ原から大坂城で決着がつくまで、なんで十五年も間が空いたのか不思議だったんですが、冲方さんや葉室さんの作

品を読んで分かったような気がしました。

十五年後にいきなり難癖なんくせをつけてきたような印象がありますが、実際にはその間ずっとやりあっていたんですね。

冲方 関ヶ原から十五年、家康から呪まれののしれながら生き延びてきたというのはいすごい。それは茶々の功績です。

木下 開戦を決めたのは茶々で、茶々のやり方によって豊臣家は残ったかもしれないというのもありますよね。

冲方 木下さんの真田幸村さなだゆきむら(信繁のぶしげ)は、大坂方の武将に影武者が出てくるとは思いませんでした。あれはどうして思いついたんですか？

木下 史実の幸村って、なぜ戦いに行ったかが分からないんですね。徳川家への恨み



## 冲方 丁

(うぶかた・とう)

1977年岐阜県生まれ。早稲田大学在学中の1996年に『黒い季節』で第1回スニーカー大賞金賞を受賞し、作家デビュー。2003年、第24回日本SF大賞を受賞した『マルドゥック・スクランブル』などの作品を経て、2010年『天地明察』で第31回吉川英治文学新人賞、第7回本屋大賞、2012年『光圀伝』で第3回山田風太郎賞を受賞。著書に『はなとゆめ』など。

なのか、豊臣家の恩のためなのか、自分の野心なのか。なので完全に創作の人物をつくり、自由に動かしました。

乾 かなりの変化球ですよね。「妖刀」ならぬ「妖銃」ってはじめて聞きました。かっこいいですよええ。

木下 幸村を討ち取ったのは西尾宗次にしおむねつぐという松平忠直まつただち隊にいた鉄砲足軽なんです。が、実は幸村は鉄砲に造詣ぞうけいが深く、それで繋がりがあんなあ、と。あとは実際の幸村は見栄えのしない小男だったといわれていて、イメージとギャップがあるんです。そこでもう一人の「幸村」を考えてみました。

天野 僕が書いた松平忠直は、その幸村と戦場でぶつかり合うんですね。派手な存在

だけに最初は幸村のことを意識していたんですが、書いていくうちにこれはあくまで忠直の話だと気にならなくなりました。

沖方 クリスチャンネタを入れてきたのは意外でした。大坂後の治世を生きた人ですが、こういう決着点をつけるのか、と。

天野 忠直の墓が九州にあるんですが、非日本的でキリシタン様式に見えたんです。

それは後の改易の理由にもなるし、ヒロインのお蘭らんの墓もそこに並んでいるんです。

木下 お蘭らんって実在の人物なんですか。最後にちよっと笑わせてくれるところがまた上手い。家康みたいなのがお祖父おじいさんだったら嫌だったでしょうね。

天野 戦国武将の二代目を書いてくれという依頼だったんです。それで家康の血縁で

考えました。家康はもちろん、家老たちも戦国の生え抜きでうるさい、どんどん屈折していったのが見えてきます。

乾 僕は天野さんとは逆に、歴戦の勇者という注文でした。伊達政宗だてまさむねや藤堂高虎とうどうたかとらなど何人か上げてもらった中で、一番馴染なじみがなかったのが水野勝成みづのかつなりだったんです。それで僕の場合は、どこで忍者を使うかが問題でした。自分の作品はだいたい忍者なんです（笑）。大坂の陣といえは真田十勇士ですが、それは誰かが書くだろうと。調べてみると、福山藩主ふくやまになってからのものですが「五霊鬼ごりょうき」という史料があり、勝成の周辺で妙なことが起こっている。これは目先のちがう話ができるぞ、というのが発想ですね。



## 天野純希

(あまの・すみぎ)

1979年愛知県生まれ。愛知大学文学部史学科卒業。2007年『桃山ビート・トライブ』で第20回小説すばる新人賞を受賞し、作家デビュー。2013年『破天の剣』で第19回中山義秀文学賞を受賞。他の著書に『風吹く谷の守人』、『戊辰繚乱』、『信長 暁の魔王』、『覇道の槍』など。

天野 冒頭もうつうに六角義定かくかくよしただが出てきたときはどんな話になるんだろうと思いました。これは続きが読みたい。

木下 短編の中でオールスターをやっていますよね。宮本武蔵みやもとむさしは出てくるし、快川かいたん紹喜じょうき（甲州こうしゅう恵林寺えりんじの僧そうで武田信玄たけだしんげんのプレーンとして有名）も。

沖方 そして小西行長こにしゆきながが出てきて印籠いんろうの秘密を勝成に渡す……キターって思いましたね（笑）。今回の趣向きゆうきゆうの凝らし方ではダントツですよ。

乾 かなり弾はじけたつもりでしたが、木下さんの〴〵幸村二人一役はつにんいちやくには驚きました。うわ、やってるなあって。



## 乾 緑郎

(いぬい・ろくろう)

1971年東京都生まれ。2010年『忍び外伝』で第2回朝日時代小説大賞、『完全なる首長竜の日』で第9回「このミステリーがすごい!」大賞を受賞し、作家デビュー。他の著書に『賽の巫女 甲州忍び秘伝』、『鬼と三日月 山中鹿之介、参る!』、『海鳥の眠るホテル』、『鷹野鍼灸院の事件簿』、『機巧のイヴ』、『思い出は満たされないまま』など。

### 戦いを締めるのは誰だ!?

冲方 今回の『大坂城』の武将たちはある種楽しげですよ。勝敗は見えきっている分、手練手管で自分をいかに立たせるかというところに腐心していたように感じます。ザ・ラスト・オブ・戦国、いま!

木下 なんとなく、高校野球の甲子園9回裏ツアーアウトな感じですよ。ホームランが出て絶対勝てない、でも一塁にヘッドスライディングするような清々しさを感じてしまいます。もう勝ち負けじゃない。

冲方 でも結果は死屍累々なんですよ。お前らのせいで何人が死んだんだ、という。

天野 皆が皆、後先を考えていない。エゴ

がすごく渦巻いているような感じですよ。

冲方 そういう意味ではすごい集団が十万人も大坂城に集まっていた。取り囲んでいる方も怖くなりますよね。こいつら皆殺しにしないとヤバイぞ、と。実際、大坂での死者の数が尋常じゃない。

木下 そんな状況のなかで、冲方さんの秀頼はやっぱり戦わない。大坂方の人間たちとのコントラストがすごく上手いですよね。史実とはいえ人物配置がドラマでつくったように効いています。

冲方 史料によると戦闘に参加したこともあるらしいんですが、ただ具体的には残っていないんです。馬術と剣術、弓術は達人だったようで、一度だけ外に出てしまっただけで、慌てて引き戻されたことがあったように

す。それは例外中の例外で基本は見守るだけ。日本の精神性で統べる君主はある種女性っぽい。武将たちを見送り、帰ってきたら<sup>ねむら</sup>。家康のほうがよっぽど危ない橋を渡っています。

木下 死にたがりの不良たちを見守るような感じだったんですかねえ。

天野 武将たちとの会話がほとんど残っていないのが残念で、話が噛み合ったのか気がなるところです。

冲方 多少はあったと思うんですよ。でも上方の主従関係ってどういうコミュニケーションをとっていたのか……。豊臣家って半分は公家ですからね。

木下 そういう人たちにしてみたら、牢人衆ってホームレスみたいなものじゃないで

すか。野で生きてきた者と公家のような者が一緒にあって戦い、一年もったというのがすごい。異文化集団が基本的には裏切りもなく最後まで戦い抜くんですからね。

乾　ならず者にとって豊臣家＝公家というのはわかりやすい象徴ですから、気持ちのひとつになりやすかったんでしょうか。

冲方　でもお互いに従うことはない。皆、己のモチベーションで見せ場をつくるために戦っていますからね。そこは徳川勢とは違います。

天野　徳川方にとってはそんなに意味のある戦いではなかったと思います。領地がもらえる見込みもないし、せいぜい名声が得られるかどうか。でも、忠直は祖父・家康から前に出るなと言われながらも、冬の陣

の真田丸攻めで一番乗り争いに出るんです。家康への意地とか、初めての大戦で華々しい手柄を立てたいとか、二代目には彼らなりのモチベーションがあったというのが徳川方の面白さです。

乾　勝成の場合、大坂の陣のときはもう五十歳を過ぎていましたからね。完全な勝ち戦でしたし、どうだったんでしょう。話としては戦局を見据えつつも、それに縛られない書き方を選びました。夏の陣での伊達の味方撃ちというのはいずれにせよ、戦の後もなぜかお咎めなしで終わっているんです。勝成配下の神保相茂隊三百人全滅にもかかわらず、撃つ理由は謎のまま。先の「五霊鬼」もそうなんです。勝成のまわりには妙なことが起きているんですね。時



## 木下昌輝

(きのした・まさき)

1974年奈良県生まれ。近畿大学理工学部建築学科卒業。フリーライターとして関西を中心に活動。2012年「宇喜多の捨て嫁」で第92回オール讀物新人賞を受賞する。受賞短篇を含むデビュー作『宇喜多の捨て嫁』が第152回直木賞候補となり、2015年、同作で第2回高校生直木賞、第4回歴史時代作家クラブ賞新人賞を受賞。

代伝奇的な意味では非常に魅力的な人物です。

木下　実は「五霊鬼」は僕も考えていて、オール讀物新人賞を受賞して最初に書いた短編の題材が「五霊鬼」でした。載るには至らなかつたんですが、今回「五霊戦鬼」というタイトルを見たときはショックでした。そして読んでみたら、自分には考えもつかない切り口でさらにショック。

天野　僕は以前からゾンビものを書きたいと思っていて、それで「五霊戦鬼」にウワツてなりました。前に山中鹿之介やまなかしかのすけを書く話があつたんですが、そのすぐあとに乾さんが『鬼と三日月』を出されて、ヤバイと思つて読んでみたら、あれ、これ山中鹿之介というか……ゾンビものだ！　つて。

乾 あれは山中鹿之介が毛利のゾンビ足軽と戦う話です。読んでくれたんですね、嬉しいなあ。

天野 「五霊戦鬼」もゾンビ的要素のある話で、それで興味を持って読みました。

冲方 この企画も段々とバリエーションが広がってきました。今回、富樫倫太郎さんは武将でなく商人ですからね。戦場を俯瞰して見ることが出来る存在を出してきたのは、上手いなあと思いました。どちら側でもなく、自分の利という明確なモチベーションを持つてゐるわけですからね。

木下 大坂の歴史の中で商人という存在はとりわけ大きいです。大坂の陣のあと、大坂には心齋橋を造った岡田心齋、道頓堀を造った安井道頓の一族など、後世も地名と

木下 面白かったですよね、千姫（家康の孫で秀頼に嫁いでいた）救出。地べたを這いつくばるような福島正守の視点で、落城シーンの臨場感はすごかった。

天野 伊東さんは『関ヶ原』では家康視点で書かれていましたが、大局と地べたの両方が書けるのはすごいと思いました。千姫をめぐる愛だ恋だとなるのかと思いきや、なるほど、こう来るか、と。

木下 千姫救出事件のもうひとりの立役者、坂崎直盛というのは、事件後なぜか殺されてしまうんですが、悪役として書かれがちなんです。それをああい切り口でかつこよく書かれる。伊東さんは男の書き方が本当に上手いです。

乾 男度が高いですね。福島正守の話だ

して残るような商人が出てきています。あの意味、商人が本当の勝者かもしれない。そういう人物を取り上げるのは面白い。

冲方 まず大坂という街が独特ですね。

朝廷のある京都とは違う。「大坂商人」というのが固有名詞のように扱われる。戦以外の勝ち負けで、別の「決戦！」感がある。

乾 兵糧米なんかがどう城内に運ばれているのか、その空気や段取りなどはイメージしにくいんですが、こうやって具体的に書いてくれると面白い。侍、同士、足軽、同士が戦う興奮とは違うものがありました。

冲方 一方、伊東さんは真つ向からくるのか変化をつけてくるのか、そういう風に乗めてくるかやっぱりになりました。

けかと思つたら、坂崎も柳生宗矩も、出てくる男たちがみな男つぽい。大坂の陣は城が燃え落ちて終わりますが、その中で何があつたかが読める。トリを飾るのに相応しい一篇だと思いました。

冲方 大坂城は女性が外交を繰り広げた城なので、最後に男たちが活躍していたというのは、気持ち的にはストンと落ちますよね。炎に包まれた城の中を千姫を抱えて駆け抜ける場面は、まるで「ダイ・ハード」のような！

天野 天守閣のてっぺんから飛び降りるんじゃないか、くらいの勢い。でも、この一冊がきっちり締まった感がありました。

## 家康の考えていたこと

冲方 大坂城はとにかく巨大で、経済的にも日本最大の財産を抱えていた。そんな城の中にいる人間は何を思っていたんだろ、か、ということをまず考えましたね。皆さんはどこに面白さを感じましたか？

天野 『関ヶ原』のときと違って、野戦じゃないというのが面白い。城には普通に暮らしている人々がいるし、女性もいる。

木下 城が主役ですよ。だから富樫さんのように武士じゃない人を書いて面白。あとはさっきも言った甲子園と同じで、敗者を見ているような感覚。大坂って、そういうDNAを持つてしまったんですかね。負けを楽しむ、敗者の中に美しさ

ころへ、家康が飛車を二十枚くらい使って攻め立てる感じですかね。

乾 うまいこと言いますね。

木下 昔はそういう家康が嫌いでした。人生のドラマとして波瀾万丈はありますが、華やかさが無い。

乾 僕は家康の情けないシーンが好きです。三方ヶ原での敗走（一五七三年、織田・徳川連合軍が遠江・三方ヶ原にて武田信玄に敗れる）とか、大坂夏の陣でも、絶対に負けようがない戦なのに幸村に追いつめられたり。脇の甘いところが小説で書くには面白い。

冲方 ピンチというか見せ場をつくりましょね。関ヶ原でも危ないところまで行っちゃいますからね。

を見る。大坂の陣はその原点といえますか。

乾 敗者のDNAということなら、大坂城は石山本願寺の跡地に建てられているわけで、僕なんかはどうしても怨念が渦巻いているイメージがありますね。その一方で、城の周辺に、戦の勝ち負けとは違うところでの目的や狙いを持った人々がいるのが面白いですよ。牢人や商人なんかが跋扈しているような二面性が感じられる空間。

冲方 畿内一体を経済的に支配していた大坂という町が一敗地にまみれる。これって戦略的、戦術的なゴールがわかりやすい戦いですよね。

木下 将棋でいうと王、城をとったら終わり。豊臣が穴熊でがちに固めていると

乾 戦略家や石橋を叩いて渡るイメージがあります。たまたま死なないで済んだだけともいえます。だから三方ヶ原では、慌てて逃げ出してウンコ漏らしちゃう（笑）。木下 けっこうエンターテイナー。プロレス的なところがありますよね。

天野 今回の決戦は、印象として徳川方のほうが弱いですよ。幸村を討った武将の名前といわれても、ほとんど出てこないと思うんです。大坂城の面々のほうが華々しい活躍をしています。

冲方 家康が活躍した武将を褒めないというのがすごい。もうすでに戦後のことを考えているんですよ。

木下 西尾がああやってこうやって幸村を討ち取ったと説明しても、ぜんぜん認めて

くれなかつたんですよ。あえて褒めなかつたのは、戦いの時代を終わらそうとした表れなんですよ。例えば、冬の陣で本丸に向けて大砲を撃つたといいますが、まったく落とせなかつた真田丸に撃てば一発で済むじゃないですか。それも、先のことを考えて大砲の威力をわからせないようにした、とも考えられます。

冲方 そういわれても納得するような人ではありませんよ。

乾 一方で合戦が決まってる返つたというようにも書かれていますよね。そういう性格もあった。

冲方 もう七十代、最後の炎ですよ。決戦の前に半年早く死んでいたら、話はまったく変わっていただろう。そう思うと、家

康の最後の執念は涙ぐましい気分にもさせられます。

木下 たしかに執念がすごい。大坂の陣が始まる前に、家康が呪い殺したんじゃないかってくらい次々と主要な大名が死にまくってますからね。

冲方 逆にいうと彼らが死ぬまでの十年間をどうやって待てたのか。何を確信して待てたのか。見ているスパンとか広さが同時代の人たちと違いすぎます。淀殿も相当な外交上手だったと思うんですが、やっぱり家康が一枚上手。七十代になって焦るってさすがに遅すぎるだろう、と思いますが、秀頼が成長する前に潰さなければならぬとそこで焦ることができるのがすごい。そういう意味では大坂城の決戦は戦国の幕切

れであると同時に、戦国のDNAを残さないために皆殺しに入つたともいえます。華々しさと陰惨さが紙一重。平和路線でいくならもうちょっと助命嘆願を聞いてやれよって思いますが、人間に線を引いていやすからね。ここから先、日本に住んでいける人種とそうでない人種で。そんな悪魔なんだか、神なんだかわからない視点をよく持てましたよね。そうか、そういうものすごく深遠なことを考えているから隙ができるのか。

木下 戦後の事を考えていたら、あ、目の前に幸村が！ って（笑）。

## 戦国武将もやっぱり人間

冲方 秀頼を書く際、最初に立てたコンセ

プトは「日本最大のヒッキー」でした。徳川史観に基づく軟弱ぶりを極限まで高めて書こうとしたんですが、史料を読んでいくと明らかに辻褄が合わない。身長が一九七センチあるとか、馬術が上手いとか、学問の面でも所要所で評価されている。本人直筆の手紙なんかを見ても、これは馬鹿じゃないなあ、と。「大坂城の中から出られない弱い男」ということなら感情移入もしやすいんですが、どんどん貴公子になっていって、わけのわからない精神性が面白かつたんですが、実に困りました。

木下 僕は幸村のコンプレックスの部分に自分自身との共通点を見いだしました。九度山に配流されていたとき、父の昌幸が死んだ際に家臣がほとんど離れてしまってい

るんです。家臣に逃げられた男、そこを意訳したら書けそうだと思いますね。

天野 僕は忠直をいいとこのボンボンと捉えていて、戦場がいいと見せてやろうと突っ走ったら真田の首がとれちゃったらしいの話にするつもりだったんです。でも調べていくと、実際は地元の百姓に愛されていたりで予定が狂ってしまいました。海音寺潮五郎が短編で忠直を書いているんですが、まあ、ひどい暴君ぶりなんです。それが一般的なイメージなら、それをいじてやろうと思いました。

乾 勝成は人生の前半がグダグダな人なんです。仕事が長続きしないとか、いろいろやったことがうまく行かないとか、僕も人生グダグダな時期が長かったので、共感す

政治的にも構造がはっきりした地点での戦いが描かれているので、絶対に読みやすいと思います。身構えず、気軽に読んで欲しいと思います。

乾 今回初参加ですけど、この面子の中に放り込まれたとき「ちゃんと爪痕を残さなければ！」と意識しました。埋没したくないと。皆さん趣向を凝らしていますし、物語の中だけじゃなく、現実の作家同士の戦いのようなものも感じていただけるんじゃないでしょうか。そういった緊張感が書いていても面白かったです。

天野 作家が苦悩した分作品が面白くなるなら、これはものすごく面白い一冊だと思います。苦悩と猜疑心、他の人がどう出てくるか、いろんなものが詰まっていると思

るところはそこですね。主君から奉公構を受けたときもけっこう長い時期放浪し、忠直と同じように悪名を残しているんです。

意味もなく坊主を斬ったとか。後々藩主になったときに出てきた話なんでしょうが、あんなことやらなきやよかった、とかの後悔がどうも他人事とは思えなくて……。

冲方 わかります。やっぱり愛すべきポイントを探しますよね。

乾 そうですね。戦国武将といっても、やっぱり人間なんです。

### 「決戦！」に臨む読者へ

冲方 作家がこういうチーム戦を繰り広げるのっていいなあ、あらためて思いました。特に今回は、大坂城という地形的にも

います。

木下 競作なので、他の人を考えながら書くというのは、囲碁とか将棋のような感覚がありました。こういう手を打ってくるなら、自分はどう出ようとか。作家がどう考えて書いたのか、また、この一冊を受けてこの先どう変わっていくのか。そんな見方もできると思います。顔を合わすまでは、『関ヶ原』のときの葉室さんのコメントじゃないですが、霧の中で書いているような状態でした。それが今回皆さんと話ができ、これから書くものが変わりそうな気がしています。ありがとうございます。